週刊 おほピョンこども新聞
第12号

町に勉強の場所を

被災した塾の先生、力を合わせ

女川町 女川向学館

午後4時20分。送迎（そうげい）バスを降りた子どもたちが駆（か）けこんできます。「先生、こんにちは一！」

女川向学館は、東京の団体「カタリバ」が宮城県女川町に開いた小中学生の塾です。場所は女川一小の空き校舎1階。

町は3月11日の津波で被災し、一小は住民の避難所（ひなんじょ）になり、児童は女川二小に通っています。

この日の6年生の勉強は国語でした。プリントの文章を読み、意見を出し合って問題を解（と）いたり、一人一人で取り組んだり。2チームになって黒板に漢字を書く競争も。

一小の高橋光生（ひかる）君（12）の夢は、考古学者になること。「ナスカの地上絵やピラミッドのなぞを解きたい。だから、たくさん勉強したい」

「花でいっぱいのお花屋さんを開きたい」と話すのは、二小の勝又沙季さん（11）。「勉強が大好きというのじゃないけど、向学館へ来るのは楽しい」

「絶対に野球選手になるんだ」というのは、同じ少年野球チームでプレーする一、二小の男子3人組。「勉強もするよ。今は、社会科の歴史にハマってる。戦国大名の作戦ってすごく面白い」ですって。

5月上旬、カタリバの鶴賀康久（つるがやすひさ）さん（30）が町を訪れて気にかかったのは、避難所のすみに段（だん）ボールの机をならべノートを広げる子どもの姿（すがた）、「仮設（かせつ）住宅に勉強の場所がない」という声でした。

塾の講師（こうし）が教室を流され、避難所を回って教えている、という話も耳にしました。

そこで思い立ったのが、「場所さえあれば、教えたい先生と勉強したい子どもの願いがかなう」と無料の塾を開くこと。

準備（じゅんび）でいろんな人に会うと、町の教育委員会や学校の先生、親も「勉強に集中できる場所を子どもに取り戻させたい」と同じ気持ちでいました。

大人たちの思いがつながり、7月には向学館がスタート。全国の大学や企業から寄付金や教材も届きました。今は町の小中学生の約3分の1という200人あまりが学びます。

教えるのは鶴賀さんと地元の塾講師、12人。大半が津波の被災者です。

5、6年担当の鈴木典子さん（55）は、「この場所ができて、生徒と講師が一つの輪のように力を合わせ、よりきめ細やかな教育ができるようになった」と話します。

そして、教室で考えるのは「女川の子どもたちに、津波のせいで夢をあきらめさせたくない」。

勉強は受験のためだけでなく、自分の世界を広げ、夢をつかむための力だから。向学館にかかわる大人たちの思いです。